

# 母性の詩学

—— グロー、アフマートワ、ツヴェターエワにおける「母」——

中尾泰子

## 序

今から20年以上前に、ジュリア・クリステヴァは論文の中で次のように述べている。「母親になること」、つまり妊娠を語るためには二つのディスコースしかなく、それは科学とキリスト教神学である、と。<sup>1</sup>しかしこれが書かれた直後から、まさにその科学がめざましい進歩を遂げた結果、1978年にはイギリスで体外授精児が誕生し、フランスでも1982年に試験管ベビーが誕生した。そして代理母というものまでが可能になったが、この代理母制度はアメリカで訴訟にまで発展するような社会的問題を引き起こした。生殖テクノロジーひとつを取っても、今日に至るまで「母(性)」を自明の前提と見なす立場は揺らぎ続けていると言えるだろう。また、レズビアンが子供を持つ「レズビアン・マザー」などレズビアニズムの視点からも「母(性)」は問い直されている。

本稿では、20世紀前半にロシアの女性詩人たちによって書かれたテキストを横断的に分析することによって、彼女たちの言説においてすでに「母(性)」が現在の諸問題を先取りする形で多様な観点から捉えられていることを明らかにしたいと思う。絵画のみならず文学においても、クリステヴァが述べているように、「母」をめぐるディスコースがキリスト教と分かちがたく結びついているのは事実であろう。そこで、本稿の前半ではエレナ・グローとアンナ・アフマートワのテキストにおいて、マリアーキリストに擬した「母—息子」の関係が「母」を表象するうえでいかに機能しているかを論じ、さらに後半では、近年とみに議論的となっている「母—娘」の関係に焦点を当てて、マリーナ・ツヴェターエワのテキストにおける「母」とセクシュアリティの問題について考察するつもりである。

これらの女性詩人を論じる際、従来の批評では「母」はものを書く主体にはなり得ないかのように扱われてきた。例えば、スターリン時代に連作詩「レクイエム」を書いたアフマートワについて、息子の逮捕について苦悩するのは「母親」アフマートワであり、「レクイエム」を書くのは「詩人」アフマートワであるかのよう

な記述も見受けられる。そこには「母親であること」と「詩人であること」は両立しないという認識を明白に読み取ることができる。だが、「母」とは一方向的に書かれる対象でしかない「他者」でもなければ、一元的なメタファーでもないのである。この点を考慮に入れながら「母」の表象の多様な在り方について論を進めることにしたい。

## 1 苦悩する「マリア」の物語 —— グローの『哀れな騎士』

まず、エレナ・グロー（1877—1913）の『哀れな騎士』第1部「エリザの物語」を出産の物語として読み解いてみたいと思う。この作品は1910年から1913年にかけて執筆されたが、グローの死によって未完に終わった作品である。32歳の孤独な夢想家エリザが、ある晩窓辺に座っていると精霊の青年が現れる。彼が頻繁に彼女のもとを訪れるようになると、彼女は自分が彼にとって母親であるということを理解する。「彼の」母親ではなくて、「彼にとって」母親であるというのは、出産という過程を経っていないからである。彼は人間を愛するあまり墮落した精霊で、サタンたちによって幾度となく連れ去られ、鞭打たれる。この作品は多くの断片の寄せ集めで、精霊の息子がエリザにすべての物に魂が宿ることを論ずる場面と、精霊が受難を受ける場面とがその中心を成している。

この作品は愛他的な母性愛の物語として読まれてきたが、果たしてそうなのだろうか。自己犠牲的な精霊が物語の後半でキリストに重ね合わされていることを考えれば、『哀れな騎士』は一種の「処女懐胎」（エリザは「出産」さえしていない）の物語であり、「神の子」の母親となってしまった苦悩の物語なのである。そもそも、処女懐胎は、生の根源であると同時に逆説的に死を暗示するセクシュアリティに汚されることのない出産である。シモーヌ・ド・ボーヴォワールは『第二の性』の中で「女」と「死」が結びつけられていることについて、次のように述べている。「このように、恋人であり母である女のなかで、男がまずいとおしみまた嫌うものは、(略) 男の存在に必要ではあるが男に有限性と死を宣告する生命である。生まれた日から、男は死に始める。それは〈母〉が体現する真実なのだ<sup>2)</sup>」。そのように考えると、神話などで不死の英雄が産道すら通らずに生まれるのは何ら不思議なことではないのである。事実作品の中で、精霊がエリザにこう語っている——「あなたはまだ弱い。だから、私はあなたが精霊を産んだと思うのではないか心配なのです。だが、精霊は自分で自分を産むことができます。精霊は永遠なのです」（140頁）。エリザもまた、精霊にとって生と同時に死を約束する「おぞましい母」となることを避けることができる。しかし、この物語において「処女懐胎」は、キリストを産

んだマリアよりもはるかに複雑な問題を引き起こす。それは、いわゆる「処女」に生命が授けられたというだけでは済まされない問題である。エリザは精霊が自分の「血を分けた子供」であることを確信することができずに苦悩するのである。

一般に、母と子には揺るぎない血の絆とも言うべき「血の論理」があり、むしろ父親こそが子供との血の絆を実感することが難しいとされている。しかし『哀れな騎士』の核となっているのは、エリザにとってその一見自明な「血の論理」自体が揺さぶられてしまっていることである。エリザの「母性愛」とは、つまりグローが作品の中で世間一般の「母性愛」とみなしているのは、子供の身体に触れることである。肉体を持たない息子に触れることもできなければ、自分の女友達に会わせることもできないことがエリザを苦しめるのである。このことは次の箇所を読み取ることができる——「そして、彼女はそれに口づけしたかった。彼に肉体がないことを残念に思った」(134頁)、「ところが私は自分とあなたの愛を感じているのに、あなたに触れることができない」(147頁)、「そして、彼女は腹が立った。なぜ、彼女は彼を女友達に見せることができず、自分の母としての誇りを満足させることもできないのか」(150頁)。エリザが精霊の母であることを実感できるのは、精霊が彼女を「お母さん」と呼ぶときだけである。

つまりこの作品は、実際に子供を産んでいない「母」は「本当の」母親とは言えないのかという問題をも提起しているのである。ある意味で、それは現代における母性の見直しを先取りしていると言えるだろう。『哀れな騎士』は、いわば「自明の」母性への執着と社会的に制度化された母性への懐疑とのせめぎあいの場となっている。さらにエリザは受肉しているが、息子は肉体を持たない。作品では、あらゆる物質に魂が宿っていることを精霊がエリザに教え諭すのだが、エリザはあくまで「血を分けた子供」にこだわっている。このように身体のために母親が苦悩するというテーマは非常に現代的なテーマであろう。なぜなら、これまで人間であるマリアと神の子キリストとの身体の相違が、文学作品においてあからさまに取り上げられたことはおそろくないからである。

また、処女懐胎による出産は父親を必要としない出産、父なき生殖である。その意味で、この出産は実はグローという女性が一人で物語を生み出す過程に重ね合わされている。注目すべきは、グローの日記である。その日記の中で彼女は想像上の息子に名前をつけ、しかもその息子と『哀れな騎士』について話し合っているのである。グローはその想像上の息子についてこう述べている——「いや、私は彼を微に入り細に入り作ったので、彼はもう疑いなくどこかに存在する」(24頁)。つまり、グローはその筆によって出産を果たしたと言えるだろう。一般に「出産」はしばしば「創作」のメタファーとして使われるが、グローにおいては「出産」と「創

作」が文字どおり同一物と化している。『哀れな騎士』における父親を必要としない出産（マリアにはヨセフがいたが、エリザには子供の父親になれる男性がない）は、限りなく家父長制に抵触する。同時に、この出産は当時の女性詩人の創作活動という「出産」に重なるのである。

ただし、この物語で父性が完全に否定されているかと言えば決してそうではない。出産を経ないで産んだ子の父親が、キリストと同様に「神」であることは次の一文によって暗示されている。

母親は自分の子供を見るときこう思う。この子の瞳に私の小さな青い空がある。ああ、母親は魂がもっとも貧しいが、いつも自分の子供に神の反映を見る。このことで彼女を責めてはいけない。そう、エリザは思った。（158 頁）

これはグローが抱えていた自己矛盾である。グローにとって創作活動は「出産」という自律的な営みなのであるが、一方で、そこに外部から侵入し、出産の起源となる父性から逃れることができないでいる。日記の中では母と息子のみの関係が成立しえたにもかかわらず、物語化するときには、「父—母—子」という家族モデルを完成するための「父」の存在が必要となったのである。

## 2 国家と（母性）—— アフマートワの「レクイエム」

アンナ・アフマートワ（1889—1966）の「レクイエム」もまた、『哀れな騎士』と同様にマリア—キリストに擬した母—息子の関係を利用したテキストである。エピグラム、序にかえて、献詩、序詩、十篇の詩、エピローグからなる長詩「レクイエム」はスターリン体制下で息子レフ・グミリョーフが逮捕された1935年に書き始められている。「レクイエム」はアフマートワの生存中は言うまでもなく、死後も長らく日の目を見ることはなく、ソ連では1987年になってようやく雑誌に掲載されたという経緯がある。

それまで、いわゆる「母」としての声をういて作品を書いたことのないアフマートワが、「レクイエム」第2篇で「夫は墓に 息子は牢に／私のために祈ってください」と書いて、初めて自分を「母」と表明したこともあり、この作品はつねにスターリン時代の母親たちの苦悩を代弁するものとして読まれてきた。

この詩のそのような読みは第10篇が決定していると言えるだろう。この第10篇がそこに至るまでの詩篇を照射しているのである。

第10篇

磔

「母よ 墓にある我を見て  
嘆くなかれ」

1

天使の合唱は偉大なる時を称え  
天は炎の中に溶けた  
父に言った「なぜ我を見捨て給う！」  
だが母には「我のことを嘆くなかれ……」

2

マグダラの MARIA は身悶え 泣き  
愛弟子は石のようになり  
黙って母が立ちつくす方を  
誰も見やる勇氣はなかった

(28 頁)

ここでは、息子を奪われ、嘆き悲しむアフマトワは MARIA に、逮捕という受難を受けた息子レフはキリストに擬せられている。この一篇を従来通り「母親の苦悩の象徴としての MARIA」と解釈するだけでよいのだろうか。そもそも、なぜアフマトワは「レクイエム」を「母として」書くことにこだわったのだろうか。ここでアフマトワは、明らかにキリストの磔の場面を描いているにもかかわらず、あえて「MARIA」とは言わずに、「母」と呼んでいる。つまり、アフマトワは「MARIA」を主題にしたいのではなく、逆に嘆く母の象徴としての MARIA を持ち出すことで「母」の方を強調しているのである。この「母」は集団的な、いわゆる大文字の「母」＝「ロシアの母親たち」なのである。「レクイエム」における「母」の問題性は、「序にかえて」に端的に表れている。

序にかえて

エジョフが支配した恐るべき時代、私は十七ヶ月をレニングラードの監獄の列に並んで過ごした。あるとき、誰かが私に「気がついた」。すると、私の後に立っていた青ざめた唇の女、もちろん私の名前を一度も聞いたことがない女が私たちみんなに特有の茫然自失の状態から我に返り、私の耳もとで尋ねたの

だった。(そこでは誰もが囁くように話していた。)

「ところであなたはこのことを書けますか？」

そこで私は言った。

「書けます。」

すると、微笑のようなものが、かつて彼女の顔であったものをよぎった。

1957年4月1日 レニングラード

(21頁)

ここで注意しなくてはならないのは、「私たちみんな」という言い方である。ここでの一人称複数形は第10篇に照らし合わせて考えるならば、「母親たち」である。「十七ヶ月をレニングラードの監獄の列に並ん」だという経験によって、アフマトワは列に並ぶ他の母親たちの隊列に自分でも加わることができるのだ。この経験は第5篇でも「十七ヶ月間叫びつけ／おまえを家へと呼ぶ／刑吏の足もとに身を投げた／おまえは私の息子そして私の恐怖」と繰り返されている。この「序にかえて」の一節でアフマトワは、自分がこの時代の母親として書く資格を有することを明言している。アフマトワにとって「母として」書くことは、スターリン治下で他の女性たちと連帯するという明確な政治意識によって裏付けられている。そこで、アフマトワがいかなるコンテクストにおいて「母」を機能させているかを考えてみたい。

スターリンは、1923年に第1回婦人労働者・農村婦人大会の5周年記念日によって次のように述べている。

最後に、婦人労働者と農村婦人は、わが国の未来の——われらの若者の——母であり、教育者である。彼女たちは母性＝婦人として、ソヴェト体制に共感をよせるか、それとも僧侶や富農やブルジョアジーのしりについていくかによって、子供の心をかたわにすることもできるし、あるいはまた、わが国を前進させる健康な精神の若者を、われわれにあたえることもできる。<sup>3</sup>

スターリンにとっての「母性」は、階級イデオロギーを維持するための装置であった。ここでスターリンは「婦人労働者と農村婦人」とそれ以外の女性とを厳格に区別している。「ドイツは男らしい男と女らしい女を好む」と明言していたナチズム<sup>4</sup>や、女を職場から締め出し家庭の「炉端に返す」イタリア・ファシズム<sup>5</sup>とは異なり、ソ連では女性が労働に参加することが奨励され続けたのである。<sup>6</sup>実際、1930年代のポスターにも、赤いスカーフを結んだコルホーズの女性がさかんに描かれている。<sup>7</sup>このスターリンの政策に逆らうかのように、婦人労働者でもなく農村婦人で

もない「詩人」アフマトワ（彼女はその後1946年にかの有名な「ジダーノフ批判」において「尼僧」にして「売春婦」として断罪された）は、テキストにおいて「母」という集団を形成することによって、階級間の差異を無に帰そうとしている。アフマトワにとって「母（性）」とは、スターリン的母性イデオロギーの基盤となっている、階級を越えた連帯を生み出す媒介となっているのだ。

しかし、この戦略によって、「レクイエム」というテキストにおいて、「母」は女性たちの均質化を促し、新たな母性賛美を謳う結果に陥ってしまっている。つまり、アフマトワは「レクイエム」の冒頭で、あるいはエピローグで監獄の列に並んだ女たちを巧みに「民衆」と言い換えていくのであるが、アフマトワの「母」は女性の多様な在り方を「民衆」という実体のない単一的なものに押し込めてしまう危険性を孕むことも否定できないのである。アフマトワは「悲劇の母」としての自分を前面に押し出しながら、実は自ら言説により「民衆」を作り出しているのである。スターリン時代にあって、アフマトワの「民衆」は「レクイエム」において「女性（あるいは母）」としてジェンダー化されている。その結果、「父（スターリン）—母（民衆）—子（投獄者）」という家族のメタファーが出来上がり、アフマトワは「母性」を謳いあげることによって、はじめて自分で言うところの「民衆」になることができたのである。

ここで、アフマトワの「母」が、独裁政治という「父性」への対抗力として機能していることに注目すべきである。ジョアンナ・ハップズは、父権的な独裁政治に対抗する「母なるロシア」という図式をゴーリキーの「母」（1907年）に当てはめて考察している。<sup>8</sup>「レクイエム」の場合、「国家の父」なる独裁者スターリンに対して、悲劇を嘆き悲しむ「母」が対置されていた。そしてそれは、「母なるロシア」という伝統的な修辞を踏襲することで可能になっている。「レクイエム」でも、「母なるロシア」は「ロシア」が「母」を装うこと、「母」のように振る舞うことで表象されている。このことは次のような詩文のうちに読み取ることができるだろう。

「この悲しみの前には山々もうなだれ／大いなる川も流れを止める」（献詩）、「死の星々は私たちの頭上で瞬き／罪なきロシアはのたうちまわっていた」（序詩）、「エニセイ川は逆巻く」（第8篇）。あたかも「母」のように悲嘆にくれ、苦悩する「ロシア」は、「レクイエム」が一面で神話的で伝統的な「母」像を受け入れている証左となっている。<sup>9</sup>

### 3 セクシュアリティと「母（性）」——ツヴェターエワの「アーリャヘ」

グローヤアフマトワの作品に現れた母—息子の関係に対して、母—娘の関係を

テーマにしたマリーナ・ツヴェターエフ（1892—1941）の作品は、「母（性）」に関してさらに新たな問題を提起する。母—娘の関係を論じる際、決まって引き合いに出されるのはアドリエヌ・リッチであるが、その著書『女から生まれる』に「母—娘の情熱と狂喜が今日まで認められるものはない。かつてはあったが、失われてしまった<sup>10</sup>」という一節がある。

本稿では、このリッチ以外に、母が娘の中に自分の姿を見出し、娘もまた母の中に自分の姿を認めるという相互関係を指摘したリュス・イリガライに注目してみたいと思う。ツヴェターエフは、「母と音楽」（1934年）、「母のおとぎ話」（1934年）と題するエッセイにおいて自分の母親について回想しているが、1912年に自分に娘が誕生するとその娘に捧げる詩を幾篇か残している。自分が母でもあり、娘でもあるという関係性をツヴェターエフは強く意識していたのだった。さらに、ツヴェターエフの「母（性）」を複雑にしているのは、彼女が娘アリアドナを産んだ二年後にソフィア・パルノークという女性詩人といわゆる同性愛の関係を結んだことだと思われる。セクシュアリティとは無縁とされてきた「母」と「レズビアニズム」とが、ツヴェターエフのテクストの中でいかに融合し、あるいは分裂をきたしているのだろうか。ツヴェターエフにあっては、母—娘という関係が現実の血縁であると同時に、メタファー化された形でパルノークとの同性愛に投影されていることを考えるとき、この詩人における母親とセクシュアリティの問題は一層重要性を増す。それゆえここでは、「アーリャへ」というすべて同名のタイトルを掲げて娘に捧げた数篇の作品と、パルノークに捧げたとされている作品とを合わせて考察することにしたい。

まず、1914年にパルノークに出会う直前、そして娘が2歳のときに書かれた作品を分析してみたい。

あなたは無垢でほっそりとして  
美しく——そして誰にとっても異質な女になるだろう  
魅惑的なアマゾンに  
情熱的な女に

ツヴェターエフはここで「娘」という他者について語りつつ、実は自分の姿を投影し、描いているのである。「アマゾン」はこの後ツヴェターエフが熱中した形象であり、「情熱的な女」というのもツヴェターエフ自身を語っているのであろう。この一節は次のように続く。

そしてあなたは多分  
兜のようなお下げ髪にするだろう  
あなたは舞踏会の女王——  
すべての若々しい長詩の女王になるだろう

娘の未来の姿はすべて母であるツヴェターエワ自身を通して描かれる。娘という他者を内に抱えこむこの関係は、まさにイリガライが「あなたの中に私は自分をみつけ、私の中にあなたはあなたをみつける<sup>11)</sup>」と表現した母—娘関係である。この自己表象と一体になった他者表象は、次第に主体としての母が他者としての娘を突き放すという形を取る。

そして多くの者を突き刺すだろう 女王よ  
あなたの嘲るような刃が  
私が——夢に見るだけのものを全部  
あなたはその足元に持つだろう

あなたに対してすべてが服従し  
あなたのいる前ではすべての者が——口をつぐむだろう  
あなたは私のように——言うまでもなく——  
もっと優れた詩を書くだろう……

ここでは「私」という主体が提示され、「私」と「あなた」が、明確に分離している。だが、「あなた」は未来の娘であると同時に、「私」の理想とする姿でもある。そして「私」は未来の「あなた」に対して次第に敵対するようになる。

そう 私はすでにあなたに嫉妬する  
かくも強い羨望の念でかくも！  
そう 私はすでにあなたを不安にさせる  
自らの憂いによって

さらに母親の「怪物性」が明るみになる。

私は——姫君をさらった蛇——  
竜！——あらゆる求婚者にとって——花婿！——

ああ 私の眼の光！—— ああ  
私の夜ごとの嫉妬！

(203—4 頁)

母親の「蛇」や「竜」という「怪物」への変容は、マリアに擬した母親には起こるべくもない。しかし、この怪物性は母—娘の関係とは言え、母が娘の求婚者のライバルになるという同性に対して複雑な形の愛情を抱く「レズビアン的怪物」でもある。この詩は母と娘が一体になっていた時期を経て、次第に互いの競争者となっていく過程を物語っているが、ある意味で従来の精神分析批評の母—娘関係の図式に陥っていると言える。しかし、従来の精神分析批評のように娘の側からではなく、あくまで母親の側から描写していることは評価できるだろう。

母—娘関係が女性同士の関係に、ひいてはレズビアニズムを語るためのメタファーとして重要な役割を果たしてきたことは、すでにリッチをはじめとする研究者によって指摘されている通りだが、次に引用するのは、1916年に書かれたパルノークに別れを告げた詩の一節である。

いにしえの日々 あなたは私にとって母のようだった  
夜にあなたを呼び出すこともできた  
熱に浮かされた光 不眠の光  
いにしえの夜の私の瞳の光

恵みの人よ 思い出して  
日の沈むことのないいにしえの日々を  
母の そして娘の  
日の沈むことのない 日の暮れることのない日々を

(300—1 頁)

ここでツヴェターエワは、自分よりも七歳年上だったパルノークとの関係を母—娘の関係に置き換えている。ツヴェターエワは、この時点で、実際に長女アリアドナの母親であったが、レズビアンとしてはパルノークの「娘」だった。テキストにおいて、パルノークは「母」、ツヴェターエワは「娘」であるので、この関係は異性愛イデオロギーを揺さぶるばかりでなく、テキストの上では母—娘の擬似近親相姦でもあった。「アーリャへ」と題する作品とこの作品を考え合わせてみた場合、ツヴェターエワにとって、「母親であること」は非常に複雑な様相を呈している。し

かも、それらの作品は、互いに作品を読み解く暗号にもなっているのである。ここで、1918年に書かれた「アーリャへ」の第1篇を引用してみよう。

あなたがどこに　そして私がどこにいるのかわからない  
あの同じ歌　あの同じ心配事  
あなたと私はそのような友だち！  
あなたと私はそのような孤児！

そして　私たち二人でいるとこんなにも楽しい  
家もなく　眠ることもできず　寄る辺のない私たち……  
二羽の鳥　目を覚ましたとたん——私たちは歌う  
二人の旅人　私たちは世界を糧とする

(421 頁)

この詩はタイトルから判断すれば、娘アーリャに捧げられたものである。しかし、パルノークに当てて書かれた一連の作品において、同性愛関係が母—娘関係に読み替えられていたことを背景にして読むと、現実の母—娘関係を扱ったこの作品にレズビアニズムを見出すことも可能なのである。そうして読むと、「そして私たち二人でいるとこんなにも楽しい」という一文も同性愛賛美と読み取ることができるだろう。また、「家もなく　眠ることもできず　寄る辺のない」状態は、リッチの言う「強制的異性愛」社会におけるレズビアンたちの厳しい境遇と読み取れることも可能になる。この詩における「あなた」と「私」は、タイトル通りに解釈すれば「娘」と「私」だが、そこにはレズビアニズムが暗号のように隠されているかもしれないのである。これまで取り上げた作品のなかに、ツヴェターエフは母親を二重に書き込んでいた。先に述べたように、性的で身体的な母親と、血縁という関係性のなかに置かれた母親とが、あたかも互いの表象領域を侵犯しあっているようである。

しかし、このようなレズビアニズムと母—娘関係について、竹村和子は次のように述べている。

というのも、フェミニスト的な見地をとる精神分析でさえ（略）、レズビアニズムを「起源としてのバイセクシュアリティ」や「母娘関係」の文脈で説明しようとしてきたために、レズビアニズムの性愛を無化してしまう傾向があった。<sup>12</sup>

また、コレットのテキストにおいて、レズビアニズムが母—娘関係に喩えられてい

ることについて小野ゆり子は次のように言う。

このことはおそらく、レズビアニズムにおける女性同士の関係性を語ることの困難さ、その言語の伝統の不在と関係があるのだろう。それを語るために歴史的に蓄積された言葉を持たないレズビアニズムは恋愛関係としては男女関係に同一化され、女性同士の関係としては恋愛関係ではない女性同士の関係性に同一化されるのだろう。<sup>13</sup>

しかし、レズビアニズムを母—娘という女性同士の関係に置き換えることは、「伝統の不在」どころか、サッフォーの作品の中にすでに指摘することができるのである。レズビアニズムを表象するための母—娘関係ではなく、「母」を表象するための「レズビアニズム」であるとしたら、それは出産のみに集約されがちな「母」の身体にセクシュアリティを帯びさせることが目的ではないかと思われる。

## 結 語

「母（性）」とは何かという本質論に拘らず、女性詩人たちは「母」という形象をテキストの中で様々に機能させている。

グローは、制度としての母性に反発しつつも、自明の母性に執着する「母」を描いた。「本当の母」とは誰のことなのか——いまだにこれは、体外受精などにつきまとっている問題のように思われる。また、アフマートワはスターリン時代に「レクイエム」を書いたが、そこでは「民衆」が「母」としてジェンダー化されている。そして、ツヴェターエワはメタファーとしての母—娘関係をテキストの中で効果的に用いている。そこには、今後さらに研究されるべき母—娘の問題とその可能性を見い出すことができる。

しかし、言うまでもなく、テキストの生成の過程には歴史的・社会的背景があるのであり、つねにそのようなコンテキストに置いて読まれる必要がある。本稿で取り上げたテキストが書かれた当時、政治と母性の関係はいかなるものだったのであろうか。第2章でスターリン時代における母性については簡単に触れたが、1910年代には、思想家であり、政治家でもあったアレクサンドラ・コロantai（1872—1952）が重要な人物として挙げられるだろう。当時は貧困などによる子供の遺棄が多かったようである。コロantaiはその事態を嘆き、「母であることは個人的な仕事ではなく社会的な義務である」と主張し、国家による母子の保護を訴えた。1917年には、コロantaiの署名のもと国家保護人民委員部に母子保護課が設置されている。

今後は、このような政治と母性の問題を含めて、ロシアにおける「母（性）」の歴史性を解明することが課題となるだろう。

また、「母—娘」のテーマは1990年代に入っても、リュドミーラ・ペトルシエフスカヤ（1938—）の小説『時は夜』（1991年）で繰り返されている。ただし、ここではよりいっそう「家族」と「加齢」の問題が色濃くなっている。現代のテキストについては、また機会を改めて取り組むことにしたい。

## 註

本稿で用いたグロー、アフマトワ、ツヴェターエワのテキストは次のものである。

Гуро, Елена. *Elena Guro: Selected Prose and Poetry*, eds. Anna Ljunggren and Nils Åke Nilsson (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1988)

Ахмагова, Анна. *Собрание сочинений в шести томах, том 3* (Москва: Эллис Лак, 1998)

Цветаева, Марина. *Собрание сочинений в семи томах, том 1* (Москва: Эллис Лак, 1994)

なお、引用頁数は本文中（ ）内に付記した。また、本文中に引用する場合、日本語訳はすべて筆者によるものである。

- 1 Kristeva, Julia. *Desire in Language: A Semiotic Approach to Literature and Art*, ed. Leon S. Roudiez, trans. Thomas Gora, Alice Jardine and Leon S. Roudiez (New York: Columbia University Press, 1980), p.237.
- 2 シモーヌ・ド・ボーヴォワール『第二の性』第1巻、井上たか子・木村信子監訳（新潮社、1997年）231頁。
- 3 スターリン『スターリン全集』第5巻、スターリン全集刊行会訳（大月書店、1954年）355頁。なお、引用に際しては一部当用漢字に改めた。
- 4 ただし、ナチスの女性政策については次のような指摘がある。「ナチス体制は、女性を雇用から排除したわけではない。この事実も、一九三〇年代からしばしば明らかにされてきている。にもかかわらず、母性を奨励するために、女性が無理やり大量に解雇されたという神話が、いまでも生きている。」（ジゼラ・ボック「ナチズム——ドイツの女性差別政策と女性たちの生活」フランソワーズ・テボー編『女の歴史』第5巻二十世紀1 杉村和子・志賀亮一監訳、藤原書店、1998年、262頁）
- 5 伊田久美子「イタリア・ファシズムの女性政策——その理想と現実——」小岸昭他編『ファシズムの想像力——歴史と記憶の比較文化論的研究』（人文書院、1997年）420頁。
- 6 Clements, Barbara Evans. "Later Developments: Trends in Soviet Women's History, 1930 to the Present," in *Russia's Women: Accommodation, Resistance, Transformation*, eds. Barbara Evans Clements et al. (Berkeley, Los Angeles, Oxford: University of California Press, 1991), pp. 269-271.
- 7 Bonnell, Victoria E. *Iconography of Power: Soviet Political Posters under Lenin and Stalin* (Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 1997), p.102.

- 8 Hubbs, Joanna. *Mother Russia: The Feminine Myth in Russian Culture* (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1988), p.234. (坂内徳明訳『マザー・ロシア——ロシア文化と女性神話』、青土社、2000年)
- 9 ここで、いささか本論から逸脱した評を述べたいと思う。若桑みどりは、戦時中、日本の女性に与えられたイメージが、戦争そのものを表現する戦意高揚画ではなく、男子を抱く母性の像、すなわち「聖母子」の系譜に入るものであったことを明らかにしている。そこでは「国家」のために戦い、戦死した息子は「神」となるのである。(若桑みどり『戦争がつくる女性像——第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』筑摩書房、1995年、254頁。)一方、アフマートワの「レクイエム」においては、「国家」によって犠牲となった息子をキリストになぞらえている。「国家」に「奉仕」しても、あるいはその「犠牲」となっても「国家」を介した母子関係がマリアーキリストに喩えられていることは興味深い。
- 10 Rich, Adrienne. *Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution* (Tenth Anniversary Edition; New York and London: W. W. Norton & Company, 1986), p.237. (高橋茅香子訳『女から生まれる』、晶文社、1990年)
- 11 リュース・イリガライ「二人で一人——母と娘」大野泰子訳『早稲田文学』10月号(早稲田文学会、1983年)11頁。
- 12 竹村和子「愛について」『思想』第886号(岩波書店、1998年)21頁。
- 13 小野ゆり子『娘と女の間——コレットにおける母娘関係と男女関係の交差』(中央大学出版部、1998年)233頁。